

建築時間論

—1000年の視野から建築を考える—

(2017年12月)

加藤耕一

2017年は、日本建築協会の創立100周年を祝賀する記念イヤーでした。心からお祝い申し上げます。『建築と社会』でも、7月号と9月号で、「100年前の建築、100年後の建築」という特集が組まれていました。

その記念すべき2017年の最後を飾る12月号のなかで、私はまったく文脈を読まずに「1000年の視野から建築を考える」という論考を寄せてしまいました。「もう少し考えて書いて下さい」と怒られるのではないかと思っていたのですが、まさか賞をいただくことになるとは！ ご関係の皆様のご度量の大きさに敬意を表し、深く感謝申し上げます。

私自身は西洋建築史を専門としていますが、大昔の、それも遠く離れたヨーロッパの歴史など研究して何の役に立つのだ、と言われることもしばしばです。しかし、現代社会がいままさに経験している社会変動は、変化の渦の中心にいるよりも、地理的にも時間的にも大きく距離を取り、俯瞰して見るとさらによく理解できるのではないか、というのがこの論考の趣旨でした。こうして賞をいただいたということは、現代の建築と社会を考えるうえでも西洋建築史の視点は重要ですね、と共感していただいたということだろうと思います。どうもありがとうございます。



加藤耕一 かとう こういち

1973年東京生まれ。東京大学工学部建築学科卒業、同大学院博士課程修了。博士（工学）。

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻・教授。専門は西洋建築史。

主著『時がつくる建築—リノベーションの西洋建築史』（東京大学出版会、2017）でサントリー学芸賞、日本建築学会賞（論文）、建築史学会賞。

他に『ゴシック様式成立史論』（中央公論美術出版、2012）、『「幽霊屋敷」の文化史』（講談社現代新書、2009）、監訳書に『ロンドン大図鑑』（西村書店、2017）、『近代建築理論全史』（丸善、2016）などがある。